



TITLE:

多藝な時計の話

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 多藝な時計の話. 天界 1934, 14(158): 287-289

ISSUE DATE:

1934-05-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165540>

RIGHT:

多藝な時計の話

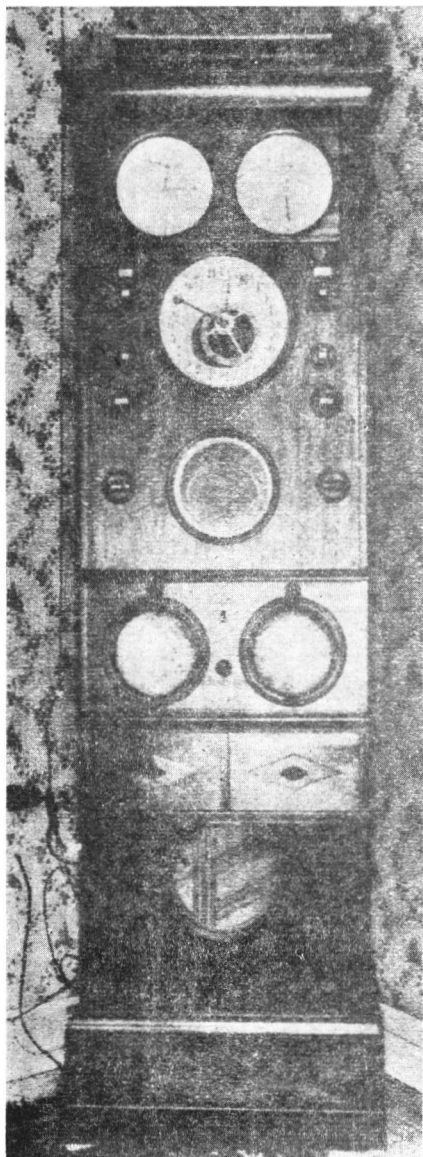
山 本 一 清

時といふものは、一種、神祕なものであり、時を測る「時計」を作るといふことは、大宇宙の支配者の心に觸れるやうな思ひをさせるものであるが、更に、又、時計製作の技巧は、單なる實利實用を超えて、すぐに深い趣味の境地に人を誘ふものである。趣味と實用との合致！ 之れが時計製作者の心である。東京上野の科學博物館の「時計の室」に飾られてある静岡縣の高林氏の數々の逸品は、かつて濱松高等工業學校の荒川氏の御盡力によつて、1931年の春、花山天文臺で陳列されたことがあるから、關西の人々も既に御承知のことと思ふが、外國でも、我が國內でも、すいぶん時計のためには心血をそゝいだ人があることを物語るものである。

こゝに掲げる寫眞も、近年、歐洲スウェーデン國で作られた珍しい時計で、一見、昔時の所謂 Grandfather's Clock といはれるたちの舊式な時計ではないかと思ふ人もあるかも知れないが、實は決して其んな時代離れの骨董でなく、まことに多藝優秀なモダン品である。

スウェーデン國の片田舎 Bofors 村に、ボフォルス兵器製造會社といふのがあつた。此の會社の一技師 David Olsson といふ人が、前後四年の日子を費して作り出したのが此の時計であるが、オルソン氏は、しかし此の工作を始める前に、先づ、世間に傳はつてゐる有名な公衆時計の構造を研究した。スウェーデンに今日存在する時計のうち、最も有名なものは、首都ストックホルム市の市役所の高塔にあるオランダ製の大時計と、今一つ、國の南部のルンド市にある「Lunda 時計」とである。此等の時計や、其の他いろいろの變つた時計の研究ののち、オルソン氏は、自分が住居するボフォルス村の小ホテルの客間に、遂に四ヶ年の丹精に成る新時計を据えつけた。決してそこには出さないで、室内に置いたまゝだから、世間には餘り知られてゐない。

此のオルソン氏の時計は、一種の電氣時計で、室内の一隅にあるサシコミ



The Bofors Clock.

から電力を取り入れ、大きさは普通の「おぢいさん時計」よりも少し高さが高い。こうして高いわけは、時計の上部に一人の鍛冶屋の人形があつて、工場の傍に立つてゐるやうに作られてゐるからである。——毎時間、時を打つ時刻がやつて来ると、二三分まへに、此の鍛冶屋の工場に赤い火がつき、正しく其の時刻が来るまで火は點じ續ける。すると、鍛冶師は其の鉄砧（かなとこ）にハンマーを降す。ハンマーが最初に打ち下されるや否や、火は消え、其のまゝ、ハンマーは時の数だけ、打ち續ける。世にある多くの有名な公衆時計は、幾くつもの人形が出たり入つたりの所作をするけれど、此のオルソン時計は只一つの鍛冶師だけである。むしろ此の時計の特徴は、指示する時刻の種類の多いことと、音楽の面白いことにある。

鍛冶師のすぐ下に二つの同じ文字盤がある。其の一つは標準時を示し、他の一つは太陽時を示すやうになつてゐる。ボフォルス村では、此の公用標準時と太陽時とが三十分以上違ふことはないのであるが、年に四度（「時差」の變化によつて）此の二つ

は合致することがある。此の二つの文字盤の下に、八個の指示器が左右二列

に置かれてある。向つて左の最上部は一年中の年の始からの日数を、1 から 366まで、示す。次ぎのものは、主の日を示す文字 (Sunday Letter)がある。之れによりイースターの日が定められる。此の文字の意味を一旦知れば、イースターの計算は極めて容易である。しかし、理屈はむづかしい。此の二つは何れも、天文學上のものでなく、全く教會關係のことであること、言ふまでもない。

主の日の文字の下には週日が現はれ、又其の下には命名日が 現はれるやうになつてゐる。右側は、最上部に年数を現はし、次ぎは 毎月の日付け、第三段目には月の名、それから最下には 金文字 (Golden Number) と、エバクト (Epact——月齢を計算する時に用ゐる) とがある。

最下部の左右二つの指示器の間には、大きい 文字盤を置き、こゝには地平線と、之れから陰顯する天の各星座の圖を表はしてある。又、すぐ 其の上には、Lunda 時計に模して、黄道十二宮を全部現はし、之れは時計として用ゐられる。此の文字盤の上には、太陽と月との位置を示し、尙ほ 日出日没や月出月没の時刻を示してゐる。

此等の種々の指示器の、ずつと下部に、左右に、二つの球面を置いてある。之れは、一つは晝間のため、又他の一つは夜間のため、世界中の 如何なる場所の時刻でも直ちに知れる構造になつてゐる。

時刻のことは之れだけであるが、しかしオルソン氏は、只の 之れだけでは未だ満足せず、此の時計臺の下に ラジオのセット一臺と、ラウドスピーカーとが置いてある。あらかじめ、今日のプログラム中から 聞かうとするものの時刻を調節しておき、^レメザマシ^ク 仕かけで自働的に、其の必要の時刻にはスピーカーがなり出すやうになつてゐる。

同様な仕かけで、蓄音機をならすことも出来るし、又、室内の 燈火をつけたり、消したり、又、湯をわかすことも出来る。例へば、朝七時に コーヒーを呑もうと思へば、前夜、眠る前に、朝の時刻に湯がわくやう 調節して置けば好いのである。

わが讀者諸君！なんと、こんな面白い時計を、天文ファンの 一趣味として作つて見られたら如何ですか。日本人なら、もつと巧妙なものが出来ますよ。